

東日本大震災

復興への 取り組み

現地を知ることから
復興支援を始めよう

鹿折地区被災市街地復興土地区画整理事業 竣工式

【宮城編】

気仙沼市・鹿折地区のまちづくり

鹿折地区土地区画整理事業 竣工式



東京都

1 震災発生―海の街 気仙沼を大きな揺れと大津波が襲った

宮城県気仙沼市―県北東端の太平洋沿岸に位置し、全国有数の水揚げ高を誇る水産業で賑わう街だ。

2011年3月11日、その気仙沼を大きな揺れと津波が襲った。三陸沖で発生した大津波は防潮堤を乗り越え、巨大な濁流となって沿岸部を襲った。1千人を超える死者と200人以上の行方不明者、家屋の倒壊は、半壊も含め2万棟以上に及んだ。

特に被害が大きかった地区の一つに、ししわ鹿折地区がある。商店や水産加工場が集まり、水産業に従事する人たちの住宅などがコンパクトにまとまった街だった。その鹿折地区を大津波と大火災が襲った。火災は、倒壊した重油タンクから海に流出した油がガレ

キにしみこみ、そのガレキに引火して広がったという。炎は13日間にわたって燃え続けた。

鹿折地区の水産加工場で働いていた中澤弘之さんは、就業中に被災した。上階に避難し何とか一命をとりとめたが、同じ職場で働いていた同僚の二人は亡くなった。暗い夜の海を前にして一人救助を待つ中、津波によって流された大型漁船が渦を巻いて市街地をあちこち動き回り、火のついた養殖筏と共に中澤さんの目の前に何度も迫った。水が引いた後、自力で脱出して避難所へ向かったが、津波の映像を見ると今でもその時の恐怖が蘇るという。

大火災が鎮火した後の鹿折地区は、

見るも無残な姿になっていた。



炎に包まれる鹿折地区

2 気仙沼市・鹿折地区―街の復興を目指して

(1) 土地区画整理事業を開始

復興に向けて模索していた2011年10月、気仙沼市は震災復興計画を策定して行動を開始した。街の未来のあり方を考えるため、行政だけではなく住民の意見も反映できるように有識者と市民の代表者による市民委員会も組織された。事業計画の進捗状況を説明する機会を市民委員会との間に設け、委員会の意見を探り入れながら計画が進められた。

津波と火災で変わり果てた鹿折地区でも、*土地区画整理事業により街を整備することが決まった。2013年7月、UR都市機構との事業協定を交わして鹿折地区の土地区画整理事業が着工。早期の復興を目指した。し

かし、街の復興は想定より困難を極めた。土地区画整理事業では、段階的に区画を整備し、所有地を別の場所に移動（換地）するが、地権者約400人との調整に苦労を要した。被災した鹿折地区の人々は、その地に居住する人、水産業や商売を営む人、企業などに土地を貸し出す人、すでに生活の本拠地を移転し土地の売却を考えている人など、



かさ上げ工事が進む鹿折地区（2015年9月）

さまざまな状況を抱えていた。地権者との相談は幾度にも及び、どの区画に換地するか粘り強く相談しながら事業は進められた。

* 土地区画整理事業とは、道路、公園などの公共施設が不十分な区域を整備・改善し、土地の区画を整え宅地の利用の増進を図る事業

(2) 土地区画整理事業と錯綜する工事

鹿折地区の土地区画整理事業の工事は、まず被災した建物の基礎撤去や水道管などの移設から始まった。その後、再び津波による浸水にあわないう、42haにおよぶ広大な面積を海拔1.8m～5.5mにかさ上げる造成工事を行ったため、時間を要した。

鹿折地区では、土地区画整理事業だ

けでなく、さまざまなインフラ工事が同時に進められた。宮城県が行う鹿折川の防潮堤工事や浪板橋の架け替え工事、地区内外にまたがる道路工事、電気・水道事業者が行うライフライン工事。さまざまな事業者が行う工事には、それぞれの決められた工期があるため、効率的に工事を進めるのは困難を極めた。お互い工事エリアを融通しながら頻繁にスケジュールを調整し、遅れそうな工期を短縮するなど奮闘した。皆、「地区の住民と約束した期限に間に合わせたい。」との思いからだった。

東京都から宮城県に派遣され、鹿折川の防潮堤工事などを担当した山下香昭さんは言う。「住民の皆さんから『私たちのために東京から応援に来てくれてありがとう』と言われると、一日でも早く工事を終わらせて、復興の

役に立てればと心から思った。」。

(3) 土地区画整理事業完了 — 6年余りの歳月を要す

2019年9月、鹿折地区土地区画整理事業は着工から6年余りの歳月を経て、ついに工事が完了。地区内で最後の工事となった「東みなと町公園」で竣工式が行われた。式典には街の整備に携わった地元住民や市の関係者が集まり、工事の完成を皆で祝った。



完成した鹿折地区(2019年9月)

東京都派遣職員が取り組んだ 鹿折川災害復旧工事

鹿折地区を流れる鹿折川も、震災により堤防や浪板橋が壊れるなどの大きな被害がでた。宮城県気仙沼土木事務所は、河口から上流まで両岸3kmの防潮堤工事や浪板橋架け替え工事など、鹿折川の復旧工事を行っている。2019年12月現在、工事は8割ほど終わりに近づいてきた。



架け替えられた浪板橋と
工事中の鹿折川防潮堤

3 実を結び始めた気仙沼復興

もうすぐ震災から9年。気仙沼市は、復興の取り組みが実を結び始めている。

2019年4月、気仙沼市民の悲願だった離島大島と本土を結ぶ気仙沼復興のシンボルだ。1時間に1本の船便が内地への唯一の交通手段だった島民の利便性は飛躍的に向上し、車で市内外から大島へ観光に訪れる人が大



完成した気仙沼大島大橋

幅に増加した。大橋開通直後のゴールデンウィークには、大島に来る観光客が4倍に増えた。大島に向かう沿道には新しくオープンした飲食店やスーパーが立ち並び、気仙沼市民を活気づけている。震災の傷跡も一日と少なくなり、交通インフラや産業も震災前の姿を取り戻しつつある。

2019年6月、東京2020オリンピックの宮城県内での聖火リレースタート地点が気仙沼市に決まった。2020年6月20日に気仙沼市を発する聖火リレーは、東日本大震災で被災した南三陸町、石巻市、女川町、多賀城市、仙台市などの太平洋沿岸を3日間かけて走り抜く。

聖火リレーは、気仙沼市を始めとし

た宮城県復興を日本はもとより世界の人々に見てもらうことによつて、これまで支援をしてきてくれた各地の人たちに感謝を伝える絶好の機会でもある。

今回の聖火リレーコンセプト「Hope Lights Our Way / 希望の道をつなごう」は、震災後復興を続ける宮城県沿岸部を体現する言葉だ。震災から復興しつつある気仙沼市の姿を発信できることを市民は誇らしく思い、その時を心待ちにしている。



活気が戻った気仙沼港
出船見送りの様子

住民参加のまちづくり——気仙沼市・鹿折地区

6年余りをかけて完了した

鹿折地区の土地区画整理事業。

鹿折地区の未来を描き、その事業に尽力した団体に、鹿折まちづくり協議会がある。

まちづくり協議会で現在会長を務める熊谷英明さんは、当時自宅が無事だったため、自分は被災者ではないと思っていた。しかし、震災後この地を訪れた記者に言われた一言が今も強烈に記憶に残っている。「熊谷さんの考えは間違っています。この地域全体が被災しているんです。この状況を少しでも改善するために市役所に掛け合うのが、あなたの仕事です。」。

震災から数か月が過ぎた頃、地域の住民も公民館を拠点にして話し合

い自分たちの街を再建するための組織づくりが始まった。各地に避難していた自治会長にも声を掛け始めた。

こうして2012年10月、鹿折まちづくり協議会が発足。鹿折地区の土地区画整理事業が動き始めた頃だった。「かさ上げしているけど地盤は大丈夫?」、「トラックが走っている安全確保が気になる」など、地域住民の思いや声を行政や関係機関につなぎ、気仙沼市役所とともに地区のあるべき姿について粘り強く話し合いを重ねた。

2014年には、地域住民と学生によるワークショップで出た意見を「グランドデザインに対する提言書」としてまとめ、市長に提出。住民との

意見交換を経てグランドデザイン初版が完成した。公園デザインや街路樹など鹿折のまちづくりの多くに住民の意見が反映された。

2019年9月、数々の試行錯誤を経て土地区画整理事業が完了。事業は終わったが、安全で活力があるまちづくりを目的に週1回の会合は今も続いている。「まちづくりに終わりはない」という思いを胸に、これからも活動は続いていく。



鹿折まちづくり協議会の様子

震 災 復 興 事 業 で 育 ま れ た 絆

震災復興のため派遣された県外職員。宮城県職員などと苦労を分かち合いながら、現地には確かな絆が育まれていた。

宮城県気仙沼土木事務所では、震災以来、県外の自治体から派遣された多くの職員が活躍している。

徳島県から派遣されている吉村勝さんは、2013年に初めて気仙沼土木事務所です工事を担当。1年の派遣期間を経て地元の徳島に戻ったが、自分が担当した現場の完成を見届けたという思いから2015年に再び派遣されて現在にいたる。

東京都から派遣されている山下香昭さんは、吉村さんと共に鹿折地区の防潮堤工事や橋梁工事

を担当している。2人は音楽でも街を盛り上げたいという思いから事務所のメンバーでバンドを結成。年2回開催される気仙沼ストリートライブフェスティバルの常連となっている。地元紙やケーブルテレビにも取り上げられ、音楽を通じて地元の人たちとも交流している。

気仙沼市役所でも全国から来た多くの派遣職員が活躍してきた。



気仙沼ストリートライブフェスティバルに参加した吉村勝さん(右から1番目)と山下香昭さん(右から2番目)

震災復興という重責を担いながらも気仙沼ならではの行事に積極的に参加して、現地を離れてからも交流が続いている。気仙沼市職員の佐藤勉さんは言う。「二元派遣職員が地元の友人を連れて、毎年気仙沼の祭りに参加してくれる。うれしいことです」。出会うことのなかった人たちが震災復興を共に支えた同志として、気仙沼には確かな絆が育まれていた。



全国の県外職員が戻って参加した気仙沼みなとまつり



気仙沼みなとまつり

～とどけ！ 海へ 大地へ 大空へ～

航海の安全と大漁を祈願する「気仙沼みなとまつり」は市内最大の夏祭り。開催2日間の人出は7万人を超える。初日は市民参加による「はまらいんや踊り」で華やかに幕が開く。「はまらいんや」とは、当地方の方言で「一緒に参加しませんか」という呼び掛け言葉。「一緒に踊りましょう」と、まつりを盛り上げ踊る。

2日目は港町エリアにおいて、郷土芸能やブラスバンドなどが練り歩く「みなとまつりパレード」、約600基が一同に揃う勇壮な和太鼓演奏「打ちばやし大競演」、和太鼓を乗せ、縁起物の装飾を施した船が海上に灯りを燈す「海上うんづら」、湾内を光で演出する「さんま船集魚灯披露」などが催される。まつりの最後を彩る約2千400発の「海上打ち上げ花火」と、これら行事の共演は見事で、観客にも笑顔の大輪が咲く。

開催日

毎年8月第1日曜・その前日土曜

会場

気仙沼市港町・由中前ほか

お問合せ

気仙沼みなとまつり委員会

(気仙沼商工会議所内)

☎0226-12214600

気仙沼市は、震災復興にあたり全国

から職員派遣の応援を受けている。帰任後に毎年祭りの日に向けて各地から友人や家族を連れて訪れる気仙沼ファンも多い。現地を訪れたことのない人はぜひ足を運んでみてほしい。



東日本大震災 復興への取組み

令和2(2020)年2月発行

編集・発行：東京都総務局復興支援対策部

東京都新宿区西新宿二丁目8番1号

電話 03-5388-2368(ダイヤルイン)

印刷物規格表第1類

登録番号(31)第24号

リサイクル適性(A)

この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。



編集・印刷：

シーアンドゼットコミュニケーション株式会社